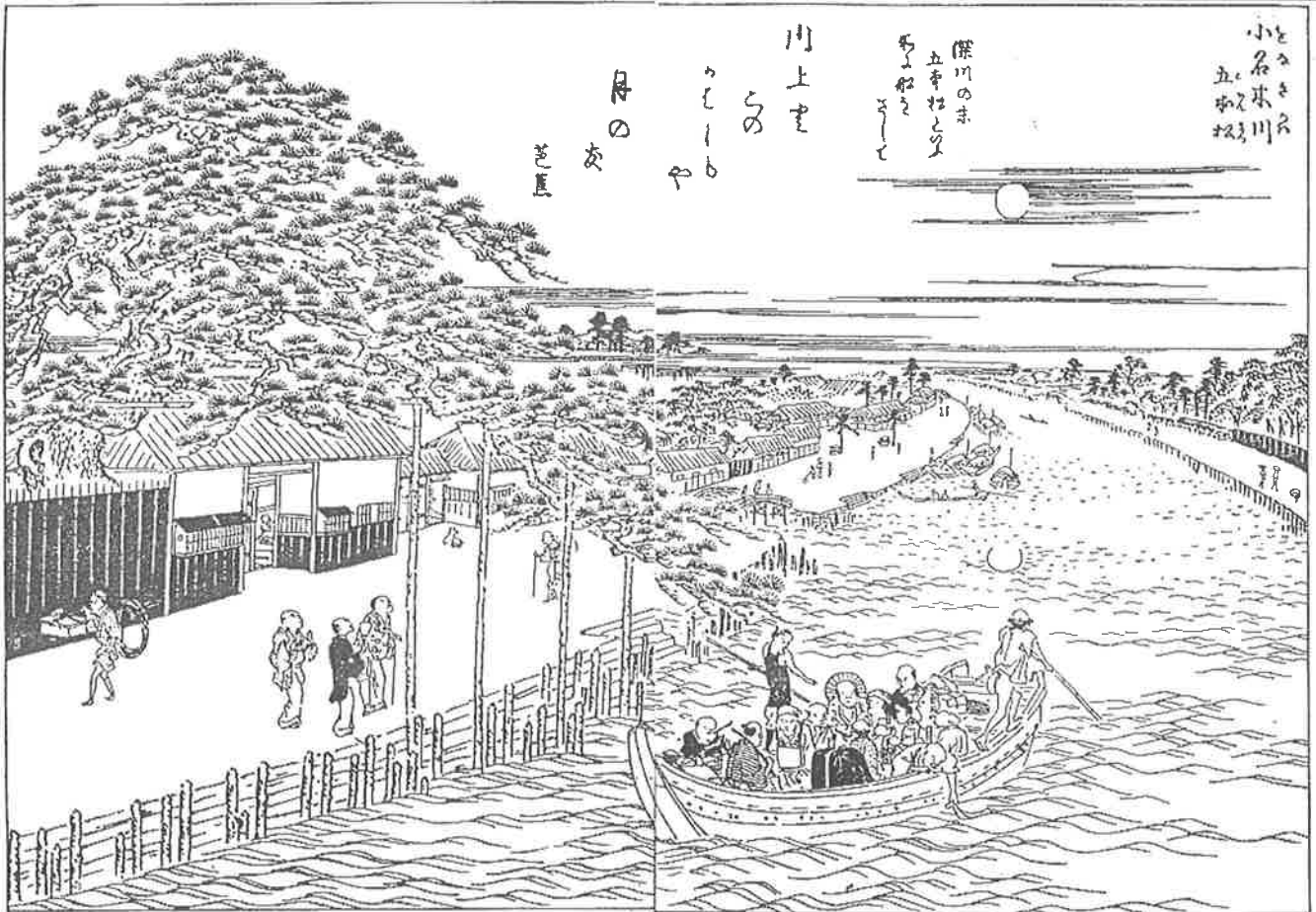


大横川から横十間川

江東区深川江戸資料館



『江戸名所図会』小名木川五本松

小名木川流域の景観や文化財を通じてその歴史と文化を考えるシリーズの第4回となった今号は、大横川から横十間川の間を西から東へと歩いてみましょう。そして、その間に点在する史跡を見ていくことにします。

大横川交差点

江東区を東西一文字に貫く小名木川に対し、大横川は南北一文字に位置し、その交差点の十文字を描いて整然と交差する様子は、ともに、人口の河川であることを物語っています。その交差点は、森下・白河・猿江・扇橋の4つの町を画しています。

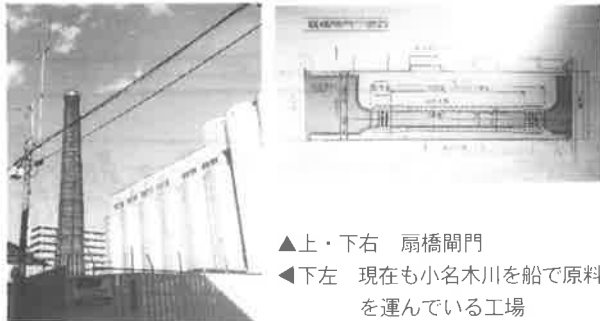
大横川は、業平橋（墨田区）の北から一文字に南下して、平野4丁目と千石1丁目を結んで架かる大栄橋まで、全長約4,000mの河川です。天正18年（1590）の徳川家康の江戸入府後まもなく開鑿されたと伝えられる小名木川に対し、大横川は70年後の万治（1658～59）のころ開鑿されたと伝えられ

ています。この万治という時期は、両国橋が架かり、本所・深川に水路網が発達し、本所・深川の開発にあたる役職として本所奉行が設置され、江戸の市街地拡大が飛躍的に進展をみた時期です。

さて、「横川」ともよばれる大横川のネーミングですが、現在の地図では、たて一文字になるこの川が「横」と名づけられたのはなぜでしょう。それは、江戸城に対して横に位置する川だからです。江戸城が正面を向くよう西を上にして描かれた本所深川絵図を見ると納得のいくネーミングです。

扇橋閘門

小名木川を西から東へ辿って行き、大横川との交差点を過ぎるとすぐに扇橋閘門です。「閘門」を『広辞苑』でひいてみると、一船舶を高低の差の大きな水面に昇降させる装置。船を入れる閘室の前後に開閉し得る扉を有し、一方を開いて水とともに船を入れたあと、扉を閉じて船を他方の水位と同位に置い



▲上・下右 扇橋閘門
◀下左 現在も小名木川を船で原料を運んでいる工場

て運航させる一扇橋閘門は、この記述の通りの装置です。小名木川の西端と東端では、地盤高（標高）がちがっていて西側よりも低い東側の地域は水害を受けやすいため、これを解消するために昭和52年に完成、翌53年から稼動しました。扇橋閘門は、史跡ではなく現役の施設ですが、水害との戦いを繰り返してきた江東区の歴史を語る証人といえるでしょう。

猿江の伝説と史跡

猿江1丁目の猿江神社には、『猿藤太伝説』が伝えられています。話は、「平安時代の康平年中に、源義家臣猿藤太という武士がおり、猿江という地名は、この武士の名にちなむもの」と伝えています。小名木川の開鑿より500年も時代がさかのぼる伝説です。実話かどうかは分かりませんが、その頃の猿江あたりが、いくつもの入江から成る海岸の湿地帯であったことを物語るものとして注目されます。さらに江戸時代の安永2年（1773）、猿藤太の木像が彫られたと伝えられていますが、現存しません。

猿江2丁目の小名木川橋北詰には、五本松の碑が建っています。付近にあった綾部藩九鬼家の屋敷から小名木川に伸びた老松の枝が美観を呈していたといえます。この様子は、『江戸名所図会』（長谷川雪旦画・天保5～7年（1836）刊＝冒頭の挿絵）、『名所江戸百景』（歌川広重画）など、江戸の多くの画家たちによって描かれています。明治になってからも、東京の名所として写真で紹介している書籍が少なくありません。しかし、残念ながら明治42年

（1909）、度重なる洪水にさらされたためでしょうか、枯れてしまい、伐られたと伝えられます。なお、江東区の木が黒松と制定されたのは、この五本松に由来します。

その横には、区登録有形民俗文化財「五百羅漢道標（文化2年在銘）」が建てられています。大島にあった五百羅漢寺への参詣に訪れる人々が、小名木川を船でやってきたことをうかがわせる道標です。

猿江1丁目・2丁目一帯は、元寺町です。多くの寺は明治末年から震災後にかけて区外へ移転していますが、現存する重願寺には、画家関根正二の墓があります。正二は、伊東深水とも親交のあった大正期の代表的な画家です。また、昭和2年に市川市へ移転した泉養寺は、深川の開発者深川八郎右衛門によって創建された寺で、もとは森下にあり、元禄6年（1693）に猿江に移転します。猿江にあったころは、広大な境内の池に咲く蓮の花で有名でした（第34号図版参照）。

現在、江東公会堂（ティアラ江東）の建つ猿江恩賜公園は、昭和7年開園の公園です。江戸時代は、猿江材木蔵とよばれ、幕府の貯木場でした。明治初年、宮内省管轄となり、大正13年に東京市が払い下げを受けて、公園として整備されたものです。一部東京営林署の施設として昭和51年まで貯木場が残されて、木場の情景を最後まで見ることできた場所のひとつでした。

横十間川

猿江恩賜公園の先で横十間川に出ます。この川も、大横川同様本所・深川の開発が本格化した万治2年の開鑿です。

大横川から横十間川まで、小名木川流域の史跡は、北岸に集中しています。南側は、嘉永5年版「本所深川絵図」でみる限り、本多豊前守、大久保佐渡守などの屋敷が並び、横十間川との交差点近くに「八右衛門新田」という記述がみられ、武家屋敷と農地の多い土地であったことがわかります。

横十間川は、木場に通じ、重要な水路でした。しかし、木場が新木場に移転した昭和50年代、その使命を終えたといえます。その後、親水公園として甕町、野鳥の森やボート場を訪れる人々でにぎわっています。小名木川との交差点に平成6年に架けられた小名木川クローバー橋は、江東の新名所となっています。